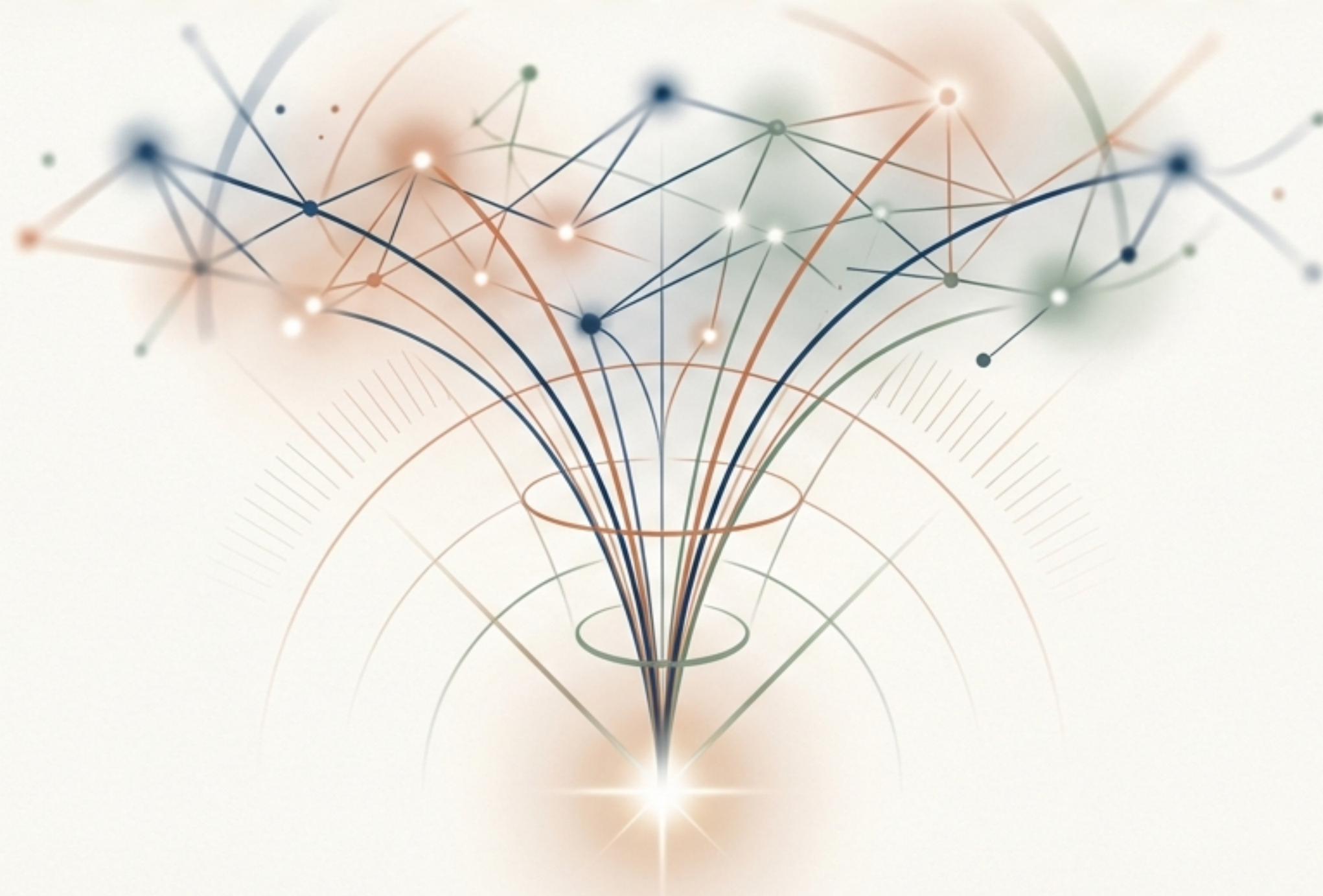


社会の要請から、教室の実践へ

「主体的・対話的で深い学び」で拓く、これからの音楽教育



なぜ今、学びの変革が求められるのか

私たちが生きる社会は、予測不能な変化の時代にあります。
この挑戦を乗り越え、子供たちが未来を豊かに拓く「生きる力」を
育むために、教育の役割そのものが見直されています。



社会構造の変化:
生産年齢人口の減少、
グローバル化の進展



技術の進化:
絶え間ない技術革新
(AI、ICTの普及)



求められる力:
他者と協働し新たな
価値を創造する力

「何を学ぶか」から「どのように学ぶか」への転換

旧来のモデル

知識の量・質を重視



新しいモデル

学びの質・深まりを重視

- これまでの教育は、教員からの一方的な知識伝達が中心でした（従来の一斉授業）。
- 社会の変化に対応するため、学習者主体のコンピテンシーベース教育へと転換が進んでいます。
- その出発点となったのが、学習者の能動的な参加を促す「アクティブ・ラーニング」です。
- そして今、その理念をさらに具体化し、授業改善の視点として示されたのが「主体的・対話的で深い学び」なのです。

学びの質を高める3つの視点：「主体的・対話的で深い学び」



これら3つの視点を一体として捉え、授業を改善していくことが、
子供たちの資質・能力をバランスよく育む鍵となります。

①

視点①：「主体的な学び」 — 学びのエンジンを育む

学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学び。

実現のためのポイント

- **問いを持ち続けられる課題設定**：児童の思考を活性化させ、簡単には答えが出ない、探究したくなるような課題を用意する。
- **見通しと粘り強さ**：うまくいかない部分を自ら修正し、より良いものを目指すプロセスを重視する。
- **振り返り（メタ認知）の支援**：自分が今どういう状況か、次に何をすべきかを客観的に捉え、自らの学びを調整する力を育む仕組み（振り返りの視点の提示など）が不可欠。



②



視点②：「対話的な学び」 — 思考を広げ、豊かにする

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める学び。

実現のためのポイント

- **多様な「対話」の形**：ペアワーク、グループでの協働、専門家との交流、書物を通じた過去の偉人との対話など、多様なインタラクションをデザインする。
- **思考を深める課題設定**：すぐには答えにたどり着けない、多様な考え方ができる深い課題を設定し、浅い思考で終わらせない。
- **当事者意識の醸成**：子供自身が「知りたい」「解決したい」と思える課題にすることで、真剣な学びに向かう力を引き出す。教員からの追加課題やヒントも重要。

3

視点③：「深い学び」―「わかった！」が「つくりだす！」に変わる瞬間

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学び。

実現のためのポイント

- 「見方・考え方」の活用：各教科に固有の思考の枠組み（例：音楽なら音の働きや仕組み）を働かせ、物事の本質に迫る。
- 知識の関連付け：断片的な知識をつなぎ合わせ、一つのシステムとして理解する。「わかった」「おもしろい」という実感を生み出す。
- 探究のプロセス：情報を精査し、根拠に基づいて考察し、他者との対話を経てさらに思考を発展させる学習プロセスを設計する。



教育改革のキーワードを整理する

「主体的・対話的で深い学び」の実現

これらを一体的に充実させることで、
学びの質の向上を目指す

個別最適な学び

一人ひとりの特性や
学習進度に応じた指導

協働的な学び

多様な他者と共に学ぶ

「個別最適な学び」と「協働的な学び」は、それぞれを追い求めるものではなく、
「主体的・対話的で深い学び」を実現するための車の両輪です。

では、この学びを
音楽科でどう実現するのか？



音楽科が目指すもの：人生を心豊かにする力を育む

音楽科における「主体的・対話的で深い学び」は、音楽を通して子供たちが自らの人生を心豊かに生き、他者と協働しながら、新たな価値を生み出すことへの期待が込められています。



高学年：「主体的に」音楽に関わる

音楽科における「主体的・対話的で深い学び」は、音楽を通して子供たちが自らの人生を心豊かに生き、他者と協働しながら、期待を守る。

中学年：「進んで」音楽に関わる

音楽科における「主体的によりで深き学び」は、音楽を通して子供たちが他者と協働しながら、新たな価値を生み出すことへの期待です。

低学年：「楽しく」音楽に関わる

音楽の楽しさや音楽に関わるしようなど、音楽を通して子供たちが自らし、新たな価値に生み出ようになります。

この質的な高まりを見通し、音楽の楽しさや美しさを数多く経験させることが、子供たちの人生を豊かにする土台となります。

音楽科における「主体的・対話的で深い学び」の具体例

主体的な学び



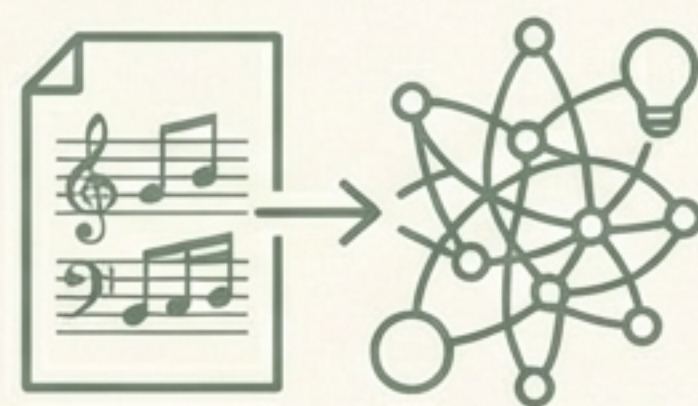
- 自分のイメージに合う音色や表現方法を試行錯誤しながら見つける。
- より良い響きを目指して、練習方法を自分たちで工夫する。

対話的な学び



- ペアで旋律を聴き比べ、感じたことを共有する。
- グループで合奏のアレンジを考える。
- 異なる文化の音楽に触れ、その背景について対話する。
- 音楽という言葉によらないコミュニケーション手段を活かす。

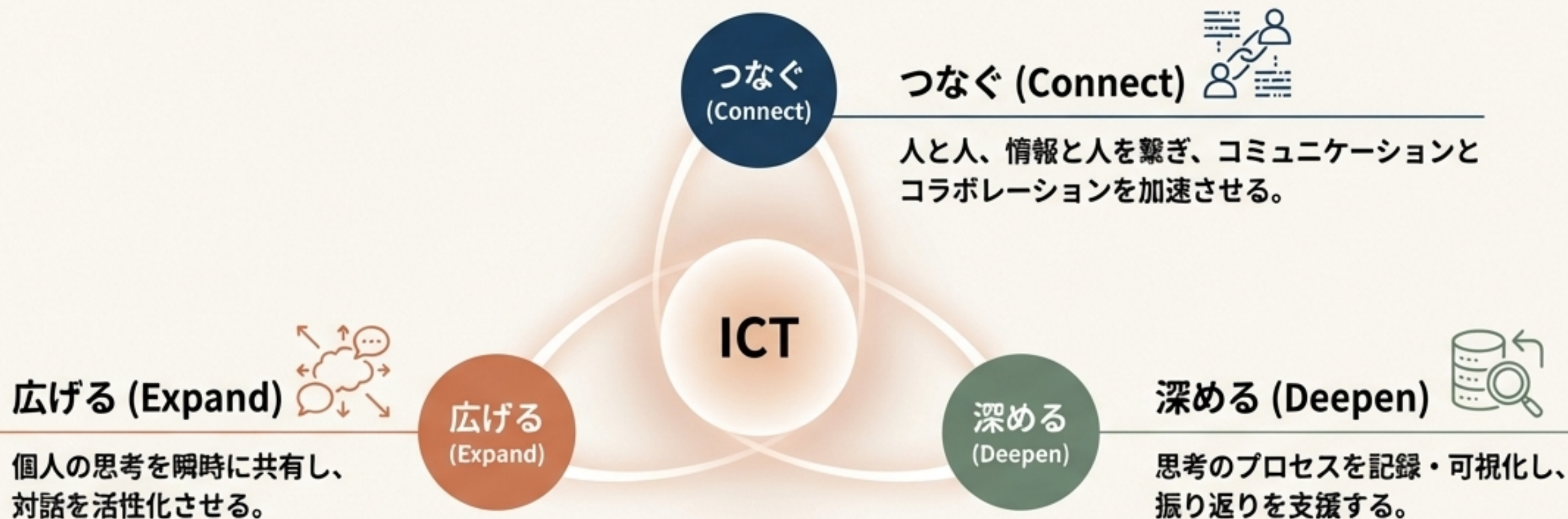
深い学び



- 曲想と音楽の仕組み（旋律、リズム、構成）を関連付けて聴き、自分なりの解釈を言葉で表現する。
- これまでに学習した知識や技能を活用して、テーマに沿った音楽を創作する。

学習環境の革新：学びを支え、深めるICTの役割

これからの知識基盤社会では、答えのない課題に対し、
多様な人々と協働して解を見出す力が求められます。



「社会全体が、ICT を駆使して一人一人が自分の考えや知識を持ち寄り、交換して考えを深め、
統合することで解を見出し、その先の課題を見据える社会へと、転換しようとしている。」

「個別最適」の真の意味を捉える：2つのアプローチ



指導の個別化 (Individualization of Teaching)

目的: 知識・技能の確実な定着

アプローチ: 教師が学習内容や進度を調整する
(アダプティブ・ラーニング、AIドリルなど)

視点: 教師主語



学習の個性化 (Personalization of Learning)

目的: 「生きる力」を高め、個性を育てる

アプローチ: 子供の興味・関心、探究したい問いを起点とする

視点: 子供主語

ICT活用は、単なる「指導の個別化」に留まらず、子供一人ひとりの「やりたい」を起点とする「学習の個性化」を実現するためにこそ、その真価を発揮します。

ICTが実現する、新たな学びの風景

学びの履歴 (ポートフォリオ)

思考のプロセスや成果物を簡単に記録・蓄積し、成長の可視化と振り返りを支援する。



深い対話の促進

友達の考えを参考に、自分の考えを修正したり、新たなアイデアを生んだりする機会が増える。



全員参加の実現

発言が苦手な児童も、テキストやスタンプで意見を表明できる。



思考の可視化

全員の考えをリアルタイムで共有し、比較・検討できる。
教師は机間指導では見取れなかった思考プロセスを把握可能に。



ICTは、これまで見えにくかった児童の学びを可視化し、より質の高い対話と、一人ひとりに寄り添った指導を可能にします。

明日の授業をデザインする：評価と一体化した学びのサイクル

授業を改善し、次へ繋げる

収集した評価情報を基に、授業を振り返り、次の指導やカリキュラム・マネジメントに活かす。

学びの姿を捉える

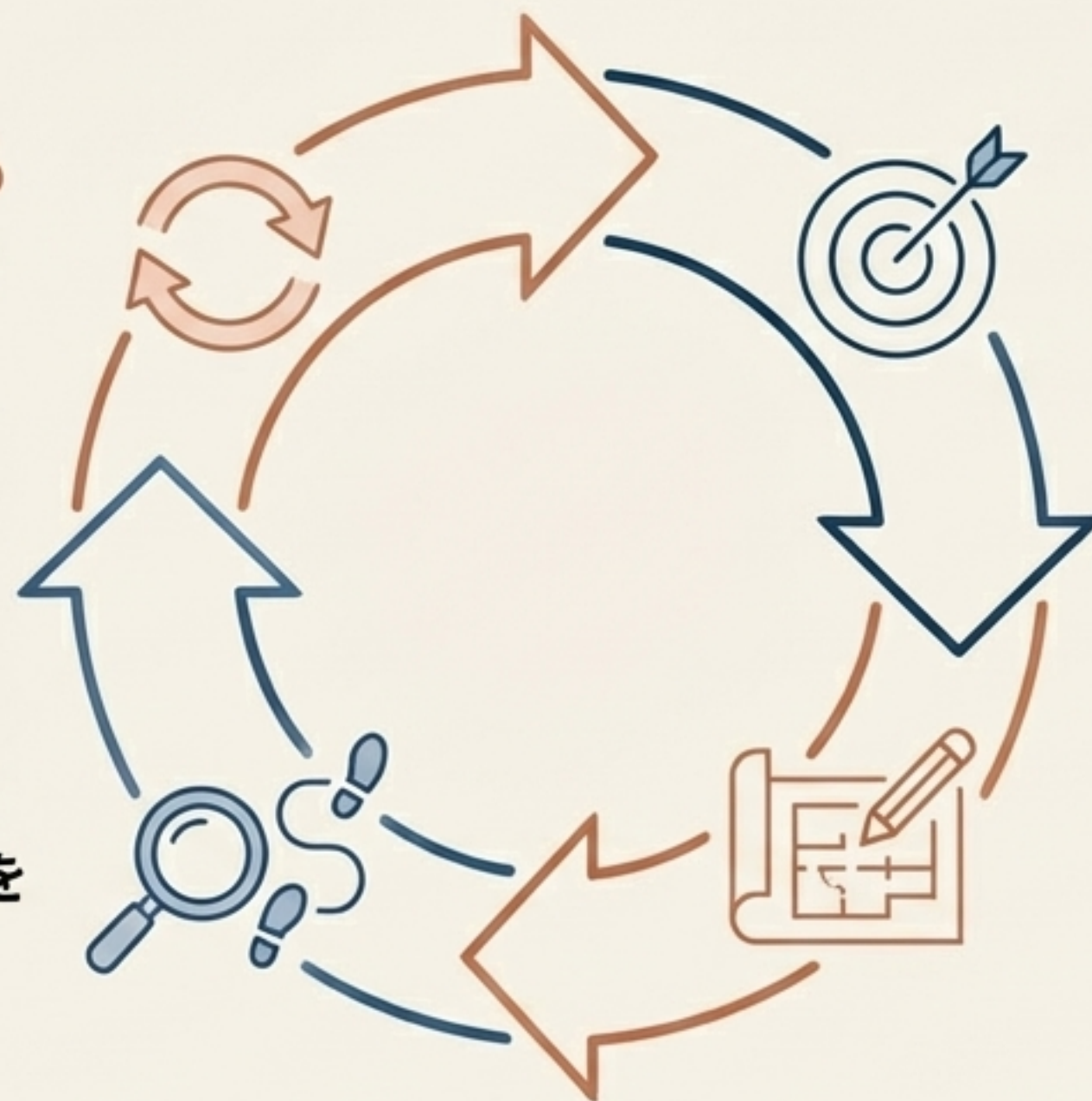
どの場面で、どのように学びの成果を見るか。ICTを活用し、学習プロセス（形成的評価）を記録する。

ゴールを明確にする

題材を通して、どの資質・能力を伸ばすのか。子供の実態（診断的評価）を踏まえて設定する。

学びの活動を計画する

ゴール達成のために、どのような活動を組み合わせるか。「学びの連続体」として入口と出口を意識する。



「主体的・対話的で深い学び」の実現は、
この絶えざる授業改善のサイクルを回し続けることから始まります。